『水滸傳語録文法諺解』紹介
—朝鮮時代の『水滸伝』愛読者の著作—

田　村　祐　之

はじめに

著者は2018年に、日本の古書店の目録から、『水滸傳語録文法諺解』（以下、『水滸文解』と表記）という古籍を購入した。朝鮮の写本で著者は守愚子。『語録類聚　俗語物名』が合綴されている。『水滸文解』は、一見したところ、『水滸傳』から語句を抜き出し、諺解を付したものである。その後しばらくしてから、他に類書がないかと調べてみたところ、『水滸傳』の「語録解」が複数存在し、韓国の図書館などに所蔵されていることがわかったが[1]、『水滸文解』、あるいは『水滸文解』に近い書名のものは見つけることができなかった。藤本幸夫氏（富山大学名誉教授）にも伺ったが、氏所蔵の目録類には『水滸文解』は掲載されていない、という返信をいただいた。

『水滸文解』表紙

『水滸文解』（『水滸傳語録文法諺解』）は書名に「語録」を含んでいるが、内容を詳細にみると、『水滸傳』の語録解とは性格が異なるように思われる。本発表では『水滸文解』の書誌情報と内容、および「水滸傳」の語録解との簡単な比較により、『水滸文解』の性格について紹介する。

1．『水滸傳』の朝鮮への傳来と『水滸文解』

1．1　『水滸傳』の成立

『水滸傳』は、南宋末期に宋江とその一味が反乱を起こした史実を題材とし

て、明代に成立した白話章回小説である。宋江一味の反乱の史実は、南宋から元にかけて説話（語り物）や戯曲などの題材となり、エピソードが増加し物語がふくらんでいった。明代に入り、これらのエピソードや物語がまとめられ、宋江をはじめとする108人の豪傑が梁山泊に集結して活躍する章回小説『水滸傳』が成立した。

『水滸傳』は成立当初は100回本であったが、16世紀後半から17世紀にかけて、エピソードを増やした120回本が作られた。それぞれ複数の版本が存在し、明代には『水滸傳』の人気が高かったことがわかる。

明の末期、金聖嘆が『水滸傳』120回本の第72回以降を「腰斬」し、第一回を「楔子」として70回に整理し、さらに自らの序や評語などを加えて75巻にして出版した[2]。清代には70回本は好評を博し、複数の版本が出版された。現存する刊本は以下のとおりである。

・貫華堂本：金聖嘆が整理批評した原刻本。75巻。崇禎十四年（1641）頃成立。
・王望如評本：貫華堂本を20巻に再編し、巻一冒頭に「王望如総論」を、各回の末尾に王望如の評を加えた坊刻本。順治年間（1644～1661）成立。
・勾曲外史序本：貫華堂本の冒頭に「勾曲外史序」を加えた坊刻本。75巻。雍正年間（1723～1735）成立。

１．２　『水滸傳』の朝鮮への傳来

兪春東氏によれば、『水滸傳』は、17世紀初頭には、『三國志演義』や『西遊記』などとともに、朝鮮半島にもたらされ、広く読まれた。またこの頃朝鮮に入った中国小説には、朝鮮語に翻訳されハングル版で刊行されたものもあることから、兪氏は『水滸傳』が朝鮮語に翻訳された可能性を指摘している[3]。

朝鮮での『水滸傳』の評価はどうであったか。内容については、『水滸傳』が宋代の反乱を題材にしたことや、梁山泊の豪傑たちが山賊行為を働いていたことなどから、『水滸傳』は盗賊を助長する書であり、世間に害悪を及ぼす書であるという批判が主である。いっぽう『水滸傳』の文章について高く評価する人もいた。例えば光海君時代の学者・政治家である許筠（1569～1618）は、『水滸傳』のとりことなり、『水滸傳』を参考にハングル小説『洪吉童傳』を書いた。また正祖時代の学者、兪晩柱（1755～1787）は「水滸是柵謀機詐之書也，是人情世態之書也，是開鑿混沌之書也，是不可有二書也」（『水滸傳』は、策謀とペテンの書であり、人情と世相の書であり、混沌を切り開く書であり、この世に二冊とない書である）と述べている[4]。

『水滸傳』は訳官の漢語テキストの一つとしても使用されており、上述した『水滸傳』の語録解は、『水滸傳』読解のための語彙集として編纂されたものと思われる[5]。

『水滸文解』も、『水滸傳』の語録解と同じように、『水滸傳』読解の手助けを目的として編纂されたようである。では書名の「文解（文法諺解）」とは何か。「語録解」との違いは何か。以下、まず書誌情報を述べ、その次に初歩的な分析を行う。

２．『水滸文解』書誌情報

『水滸文解』の書誌情報は以下のとおりである。

書名：表紙左に「水滸文解全」、右に「附語錄俗語物名」墨書
　　（『水滸文解』と『語錄俗語物名』の合綴）
巻数：全一巻
序文：水滸文法解序
版心題：水滸文解
目録：水滸傳註解文法目録
本文題：水滸傳語錄文法諺解
　　その他『水滸文解』の地の部分に「水滸錄」と墨書き
著者：守愚子
寸法：23.4㎝×16.6㎝
種別：写本
装幀：原表紙？、五針眼釘法、朱糸
頁数：総三十二葉（序＋目録二葉、本文三十葉）、一葉十行
備考：巻尾に本文と異なる筆跡で「歳在戊寅七月既望坦叟書時年五十四」と記す

３．『水滸文解』の構成―序・目録・本文

３．１　「水滸文法解序」について

『水滸傳』の語録解には序文などはない場合がほとんどだが、『水滸文解』には守愚子の「水滸文法解序」が巻頭に収められている。まずこの序について紹介する。以下に、原文テキストと日本語訳文を示す。原文テキストの句読は、「序」に附された句点に依る。

（原文）

水滸文法解序

水滸傳者，何為而作也，盖當宋末徽宗之世，上失為君之道，而奸臣如蔡京、高俅、楊戩、童貫之輩，怙寵弄權，招朋納賄，蒼生塗炭，盗賊日熾，施耐菴，以文章華國之手，不得於時而憂國忿慨之懷，無所施瀉，借洪太尉，走妖魔、天罡、地煞，化為一百單八，為楔子，百八人，據水泊，逃命，抗國為辯，盖其立意則，上失其道，民散久矣之[6]意也，今觀耐菴之書，其文章淵源，盖自紫陽書[7]流出者也，其文法、句讀，冠於諸稗史，而後人[8]，置之第五才子者，何也，百八人，雖義氣深重然，以國家言之，水注之亂民也，自謂替天行道，以財貨論之，打家劫舍者也，綱紀壞亂，倫常顛錯者，故，文雖工，而貶之第五者，良以此也，然，不妄害百姓，不妄動干戈，其鬧江州，燒無為則，為救宋江、戴宗也，攻青州，打高唐則，一救孔明，一救柴進也，其打大名則，專為盧俊義而，發也，其攻東平、東昌則，以借粮為名者也，至若祝家庄、曾頭市，自恃財富，人眾之勢，挑怨速禍[9]，自取亡滅者也，其敘事之詳密，文法之奇妙，如在目擊，令人不覺手舞足蹈[10]也，余好稗官，雜記，閲覽者，幾至三四十種而，所偏好者，無如此書也，故，撮其文法之可供當世者，寫景之形容逼真者，作為一冊，譯而解之，以備閲者之易曉，無疑[11]，非曰能之，聊以寓愛好之義云爾，

歳在柔兆[丙]閹茂[戊]陽月載生魄守愚子叙

（日本語訳）

水滸文法解序

『水滸傳』は何のために書かれたか。宋末の徽宗の時代、皇帝は君主としての道を失い、蔡京、高俅、楊戩、童貫のような奸臣が皇帝の寵愛を笠に着て専権を振るい、朋党を組み賄賂を求めた。民草は塗炭の苦しみをなめ、盗賊は増えるばかり。施耐庵は文章で国に栄光をもたらす人物であったが、不遇をかこちて国を憂い憤る気持ちを持ちつつも、それをどこにも吐き出せなかった。そこで洪太尉の姿を借りて、妖魔を逃がし、天罡星と地煞星を108の豪傑に変え、これを物語のはじめとした。108人は梁山の水辺に集まり、しがらみから抜け出し、国家にあらがうことを宣言した。その意図はつまり、上が君主の道を失ったので、民はよりどころをなくして久しい、ということである。

いま耐庵の書を見るに、おそらく朱子学の系統から生まれたものだろう。その文の構成やリズムは、他の稗史小説に抜きんでている。しかるに後の人が、この『水滸傳』を第五才子書の地位に置いたのはなぜか？108人の豪傑たちは、義侠心は非常に強かったが、国を治める視点からすれば、彼らは水辺の無法者である。天に替わって道を行うと自分たちでは言っていながら、財貨の面から

論ずれば、彼らは集団で強盗をはたらく連中である。彼らは秩序を乱し、人の道から外れた者どもなのだ。だから、『水滸傳』が文章はすぐれているのに、第五という低い地位に置かれたのは、まったくこれらの理屈によるのだ。

しかし、彼ら豪傑はみだりに民草に害を及ぼさず、いたずらに武器を振り回さなかった。江州を騒がせ、無為軍に火をかけたのは、宋江と戴宗を救うためであった。青州と高唐を攻めたのは、一つには孔明を救うため、一つには柴進を助けるためであった。大名府を攻撃したのは、ただ盧俊義のためであった。東平・東昌の二府を襲ったのは、食糧を借りるという名目だった。そして祝家庄や曾頭市のごときは、財物の豊かさと人口の多さをたのんで、豪傑たちを挑発して災いを招き、自滅したのである。『水滸傳』の叙述が詳細かつ細密であり、話や文の組み立てが独特の巧みさを持っており、まるで見たままを書いたようであり、読んでいると知らず知らずに手足が踊り出す。

わたしは稗官小説や雑記が好きで、これまで少なくとも3、40種は読んできたが、とりわけ好きなのは、この『水滸傳』をおいて他にない。その中から文の組み立てを世に紹介すべき文や、描写が真に迫っている文をいくつか選んで、一冊にまとめた。訳文を付して解説し、読者が理解しやすく、躓くことがないようにした。このようなことをする十分な才能があるというつもりはないが、少しばかり『水滸傳』が好きだという気持ちにことよせてみた。

丙戌の年　十月十六日　守愚子叙

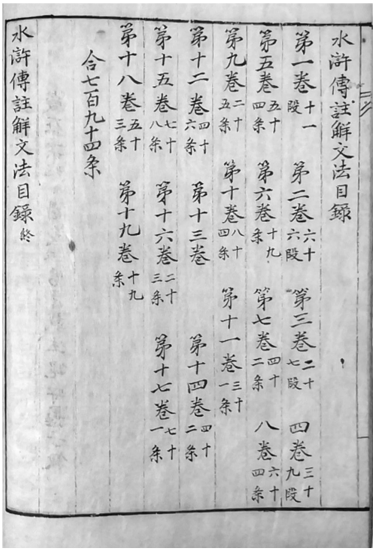
序を記した「守愚子」については未詳。序の文中に「後人，置之第五才子者，何也」とあることから、この序は七十回本の朝鮮傳来以降に記されたことがわかる。「丙戌」の歳に記されているが、七十回本が朝鮮に流入してからの「丙戌」年のうち可能性があるのは、1646年、1706年、1766年、1826年、1886年である。

巻末にある「歳在戊寅七月既望坦叟書時年五十四」は、この『水滸文解』を入手した「坦叟」なる人物が記したものと考えられるが、こちらも未詳。ただ朝鮮朝後期の学者姜鼎煥（1741～1816）の文集『典庵文集』巻四所収の「與韓重文」（韓重文への手紙）に「景曾、坦叟近又來學耶」（景曾、坦叟は最近また学びに来ているか）という一文がある。景曾は、『典庵文集』所収の「師友録」によれば、姜鼎煥の師友黄仁約の字である。坦叟は「師友録」に見えないが、景曾と同じく姜鼎煥の師友と考えられる。この「坦叟」を『水滸文解』の「坦叟」と同一人物と仮定すると、「歳在戊寅七月既望坦叟書時年五十四」の「戊寅」は1818年の可能性が最も高くなり、『水滸文解』の成立時期は1646年、1706年、1766年のいずれかである可能性が高くなる。

３．２「水滸傳註解文法目録」について

目録は「第一巻」から「第十九巻」まで、それぞれ抜き出した語句の数を「～段（条）」[12]として示し、「合七百九十四条」とする。ただ第四巻、第八巻はスペースの関係か「第」がなく、「四巻」「八巻」と書かれている。第十三巻については巻数のみで、条数の部分は空欄になっている。

目録が「第一巻」から「第十九巻」までということは、『水滸文解』で参照された『水滸傳』刊本は、19巻本ということになる。上述したように、現存する70回本『水滸傳』は、貫華堂本および勾曲外史序本の75巻本、および王望如評本の20巻本であり、『水滸文解』は上記三種以外の刊本を参照して編纂された可能性がある。『水滸文解』が参照した刊本に巻の欠落があった可能性も考えられるが、『水滸文解』に収録された語句を『水滸傳』70回本[13]と対照すると、楔子から第七十回までの各回から抜き出されており、巻の欠落はない。巻数が近いのは王望如評本であり、『水滸文解』が参照した『水滸傳』70回本と王望如評本は近縁関係にあると考えられる。


水滸傳註解文法目録
第一巻十一段　第二巻六十六段　第三巻二十七段　四巻三十九段
第五巻五十四条　第六巻十九条　第七巻四十二条　八巻六十四条
第九巻二十五条　第十巻八十四条　第十一巻三十一条
第十二巻四十六条　第十三巻　第十四巻四十二条
第十五巻七十八条　第十六巻二十三条　第十七巻七十一条
第十八巻五十三条　第十九巻十九条
合七百九十四条
水滸傳註解文法目録終

「水滸傳註解文法目録」

『水滸文解』が参照した『水滸傳』70回本を、仮に「仮想19回本」と呼ぶことにする。この仮想19回本の構成について、『水滸文解』と王望如評本との比較により明らかにする。

まず、『水滸文解』に抜き出されている語句が、王望如評本のどの巻に含まれるかを確認する。王望如評本20巻の各巻に収められる内容及び回目は、以下のとおりである。

王望如評本巻数	各巻に収められる内容及び回目
一	王望如評總論、序一、序二、序三、宋史綱、宋史目、讀第五才子書法、貫華堂古本自序、楔子
二	一～三
三	四～七
四	八～十一
五	十二～十五
六	十六～十八
七	十九～二十二
八	二十三～二十五
九	二十六～二十九
十	三十～三十三
十一	三十四～三十七
十二	三十八～四十一
十三	四十二～四十四
十四	四十五～四十八
十五	四十九～五十一
十六	五十二～五十五
十七	五十六～五十九
十八	六十～六十二
十九	六十三～六十六
二十	六十七～七十

巻一を別として、おおむね１巻に３～４回分を収めていることがわかる。

次に、『水滸文解』目録の巻一から巻十九それぞれに収められる語句が、王望如評本70回のうちのどの回から抜き出したものか、一覧表にしてみる。

『水滸文解』巻数	『水滸文解』の語句が含まれる王望如評本の回目
一	楔子
二	一～三
三	四～七
四	八～十一
五	十二～十五
六	十六～十八
七	十九～二十二

八	二十三～二十七
九	二十八～三十
十	三十一～三十七
十一	三十八～四十一
十二	四十二～四十八
十三	（無）
十四	四十九～五十一
十五	五十二～五十五
十六	五十五～五十九
十七	六十～六十二
十八	六十三～六十六
十九	六十七～七十

これにより、70回本の各回目が、仮想19巻本の各巻にどのように配置されたか、推測することができる。

注目すべきは、巻十二から巻十四である。巻十二が第四十二回から第四十八回まで、巻十四が第四十九回からとなり、目録で空欄になっていた巻十三は、欠落ではなく、そもそも存在する必要がなかったことになる。なぜ必要のない巻十三が目録にあるのかは現時点では不明である。

巻十三の問題は措いて、上の２つの表を合わせると、以下のようになる。見やすくするため、「『水滸文解』巻数」と「『水滸文解』の語句が含まれる王望如評本の回目」の配置を入れ替えている。

王望如評本巻数	王望如評本の各巻に収められる内容及び回目	『水滸文解』の語句が含まれる王望如評本の回目	『水滸文解』巻数
一	王望如評總論、序一、序二、序三、宋史綱、宋史目、讀第五才子書法、貫華堂古本自序、楔子	楔子	一
二	一～三	一～三	二
三	四～七	四～七	三
四	八～十一	八～十一	四
五	十二～十五	十二～十五	五
六	十六～十八	十六～十八	六

七	十九～二十二	十九～二十二	七
八	二十三～二十五	二十三～二十七	八
九	二十六～二十九	二十八～三十	九
十	三十～三十三	三十一～三十七	十
十一	三十四～三十七		
十二	三十八～四十一	三十八～四十一	十一
十三	四十二～四十四	四十二～四十八	十二
十四	四十五～四十八	（無）	十三
十五	四十九～五十一	四十九～五十一	十四
十六	五十二～五十五	五十二～五十五	十五
十七	五十六～五十九	五十五～五十九	十六
十八	六十～六十二	六十～六十二	十七
十九	六十三～六十六	六十三～六十六	十八
二十	六十七～七十	六十七～七十	十九

上の表の太い黒枠で囲んだ部分を見ると、王望如評本と仮想19回本で、一つの巻に収める回の数に違いがあることがわかる。例えば巻八を見ると、王望如評本は第二十三回から第二十五回までの3回分を収めるが、仮想19回本は第二十三回から第二十七回までを収めている。とくに巻十は第三十一回から第三十七回まで8回分の話を収めており、他の巻と比べて相当ボリュームがありそうである。

いっぽう、太い黒枠で囲んだ以外の部分を見ると、巻一から巻七までは各巻に収められる内容・回目がほぼ一致している[14]。また王望如評本の巻十五以降と、『水滸文解』の巻十四以降も、巻数は異なるが回目は一致している。すなわち、仮想19巻本は、理由は分からないが、王望如評本の巻八から巻十四までの7巻分を再編集して6巻（巻十三を除くと5巻）にまとめなおしたものだ、と考えることができる。

次に、『水滸文解』の本文である「水滸傳語録文法諺解」について述べる。

3．3　「水滸傳語録文法諺解」について

『水滸文解』の本文である。第一葉表1行目に「水滸傳語録文法諺解」と記され、その下に「守愚子解」と記される。

2行目から本文が始まる。本文の構成は、以下の通り。

・『水滸傳』から抜き出された語句（以下、「語句」と表記）の下に、諺解が

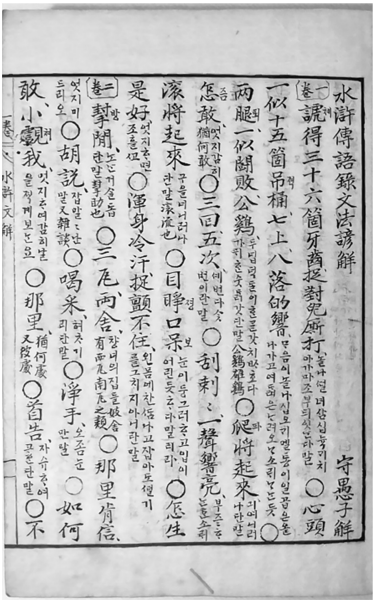
双行で記される。「語句」は第四葉裏八行まで読点が付されている。

・諺解の後ろに、漢語による語句の解釈（以下、「語釋①」と表記）が加えられることもある。

・原文の一部の字は、右側にハングルによる漢字音表記（以下、「字音」と表記）が加えられている。

・原文の一部の字は、左右に漢語による語釋（以下、「語釋②」と表記）が加えられている。この語釋②は、墨の色や筆跡からみて、後から書き加えられたものと考えられる。

試みに、「水滸傳語錄文法諺解」（以下、「文解」と表記）からいくつかの語句（読点がある場合は読点も付す）・諺解・語釋①・字音・語釋②を抜粋して解説する。王望如評本の対応する部分と必要があればその前後の部分（以下「王本」と表記）、および金聖嘆の評語（以下「金評」と表記）と対照して例示する。原文は読みやすいように、適宜読点を付す。『水滸文解』語句と王望如評本原文で、異なる字がある場合は、□で囲んで示す。


水滸傳語錄文法諺解　守愚子解
卷一　謂得三十六箇牙齒捉對兒廝打　놀나 떨녀 삼십뉵기 치아가 마조 부듸싯ᄂᆞᆫ다 말　○心頭一似十五箇吊桶七上八落的響　ᄆᆞᆷ속에 ᄒᆞᆫ 것시 열다ᄉᆞᆺ 개 ᄃᆞᆯ린 ᄃᆞᆯ이 ᄒᆞᆫ 번 올나가고 ᄒᆞᆫ 번 ᄂᆞ려가고 ᄒᆞᆫ 것시 ᄒᆞᆫ 것 ᄒᆞᆫ 것 ᄒᆞᆫ 것

（怖がって震え三十六個の歯が向き合って強くぶつかっている、ということ）
〔語釋①〕（無）
〔字音〕**諕**：체
〔語釋②〕（無）
王本　一34b04
〔原文〕洪太尉倒在樹根底下，**諕**得三十六箇牙齒捉對兒厮打
〔金評〕奇句
（解説）諺解は語句をほぼ逐語訳している。「**諕**」の字音「체」は、朝鮮漢字音である。

例2）
文解　01a03
〔語句〕兩腿一似鬪敗公鷄（両脚は戦って負けた雄鶏のように）
〔諺解〕두 넙덕돌이 ᄒᆞᆫ골갓치 ᄡᅡᄒᆞ다가 ᄭᅵᆫᄒᆞᆫ 슷돍 갓단 말
（二つのふとももは一様に、闘っている途中で負けた雄鶏のようだ、ということ
〔語釋①〕公鷄雄鷄
〔音注〕腿：퇴
〔語釋②〕（無）
王本　一34b06
〔原文〕兩腿一似**鬪**敗公雞

〔金評〕奇句○四句，一句一樣，皆奇**絕**之文[15]
（解説）語釋①は「公鷄雄鷄」のように、語句にあらわれる白話語彙を、文言の語彙で言い換える形が多い。王望如評本には「公雞」とあるが、『水滸文解』で「公鷄」とするのは、仮想19巻本の表記によったものか。

例3）
文解　02b08
〔語句〕淨髮（剃髪する）
〔諺解〕（無）
〔語釋①〕仝削髮
〔音注〕（無）
〔語釋②〕（無）

王本　三48a05

〔原文〕淨髮人先把一週遭都剃了

〔金評〕（無）

（解説）序文で『水滸文解』編纂の動機を「撮其文法之可供當世者，寫景之形容逼真者，作為一冊」と述べているが、語彙レベルの語句も掲載している。『水滸傳』読解のための語彙集としての要素も持ち合わせている。

例4）

文解　04b02

〔語句〕好歹與結果他性命（とにかく彼の命を奪ってやろう）

〔諺解〕조커나엇지아니커 나간에 져의 셩명을 결과ᄒᆞ리라

（（※前半未訳）その間に、彼の命を結果[16]してやろう）

〔語釋①〕（無）

〔音注〕歹：측

〔語釋②〕歹：（右）殘骨也（左）又音알

王本　四23a12

〔原文〕都在我身上，好歹與結果他性命

〔金評〕只聽得一句

（解説）「歹」の字音を「측」とするが、「歹」の朝鮮漢字音は「알」であり、調べた限りでは「歹」の字音を「측」とする資料は見当たらない。語釋②で「又音알」とするのは、やはり「측」に違和感を感じたのであろう。

例5）

文解　07b07

〔語句〕似錦上添花如旱苗得雨

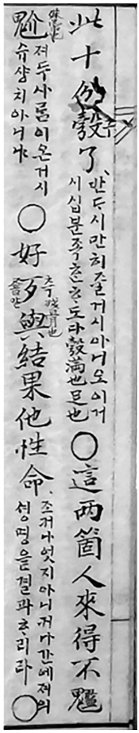
（錦に花を飾るがごとく、枯れかけた苗が雨にあたるように）

〔諺解〕（無）

〔語釋①〕本無解

〔音注〕爬：파

〔語釋②〕（無）


此十分教了、반드시만치줄거시아니오이거
시십분조ᄀᆞᆫ줄도ᄒᆞ敎滿也旦也○這兩箇人來得不
甩져두사ᄅᆞᆷ이온거시○好歹與結果他性命、조커나엇지아니거ᄂᆞ간에져의
슝명을결과ᄒᆞ리라○

「水滸傳語錄文法諺解」第一葉表

王本　六48b10

〔原文〕林冲道，今日山寨天幸得衆多豪傑到此相扶相助，似錦上添花，如旱苗得雨

〔金評〕（無）

（解説）諺解が付されておらず、「本無解」（もともと解釈はない）という語釋①があるのみである。諺解が付されていない語句は他にもあるが、その場合は例3）のように、語釋①で語句の意味を説明している。

例6）

文解　19b02

〔語句〕正是恩讐不辨非豪傑黑白分明是丈夫

（まさに、恩も恨みも区別できないようでは豪傑とは言えないし、黒白をはっきりつけられるならば男伊達である）

〔諺解〕（無）

〔語釋①〕無解

〔音注〕（無）

〔語釋②〕（無）

王本　十五14b09

〔原文〕正是恩讐不辨非豪傑，黑白分明是丈夫

〔金評〕（無）

（解説）上の例５と同じく、諺解が付されておらず、「無解」という語釋①があるのみである。諺解や語釋を加えなくとも、語句の意味は理解できるからあえて解釈しない、ということか。あるいは想像をたくましくすれば、著者守愚子は自分で語句を訳したのではなく、『水滸傳』の語録解や翻訳本を参照しながら執筆した可能性も考えられる。

４．「文解」とは何か―『水滸文解』と『水滸傳』語録解の比較から

『水滸文解』編纂時に、『水滸傳』の語録解や翻訳本が参照された可能性について検証する。翻訳本については次の機会に譲ることにし、『水滸傳』語録解に収められた語句との比較を行う。これにより、『水滸文解』の「文解」（＝文法諺解）の性格も明らかにしたい。

オンラインで閲覧できる語録解は『水滸傳語録諺解』『水滸語録』（いずれもソウル大学校中央図書館所蔵）、『水滸誌語録解』（国立中央図書館所蔵）、『水滸

傳語録』『西遊記語録 水滸傳語録』『水滸誌語録』[17]『水滸志語録鮮』『忠義水滸誌語類分回』[18]『物名彙 附西廂記語錄 水滸志 衆總語錄』[19]（以上六種は東京大学文学部小倉文庫所蔵）があるが、このうち『水滸傳語録諺解』と『水滸誌語録』は王望如評本をもとにしており[20]、巻数および回目が明示されているので、これを利用する。

以下に、王望如評本の楔子および第一回を対象に、『水滸文解』と『水滸傳語録諺解』、『水滸誌語録』それぞれから抜き出した語句を一覧表にして示す。『水滸文解』と『水滸傳語録諺解』、『水滸誌語録』いずれにも収録されている語句を□で、また『水滸文解』と『水滸傳語録諺解』、『水滸誌語録』二書のいずれかに収録されている語句を〰で示す。フォントがなく表示できない字は、字の構成要素を［　］で囲んで示す。

王望如評本『水滸伝』楔子

『水滸文解』：**諕得三十六箇牙齒，捉對兒厮打／心頭一似十五箇吊桶，七上，八落的響／兩腿一似鬬敗公鷄／爬将起來／怎敢／三回五次／刮刺〃一聲響亮／滚将起來／目睜口呆／怎生是好／渾身冷汗捉顫不住**

『水滸傳語録諺解』：**一條桿棒等身齊打四百座軍州／都姓趙／端的是／一連／雪片地／羅天大醮／怎生／恁地／降降地燒着御香／約莫／看看腳酸腿軟／尚兀自／何曾／撲地／呵／呀／托地／捉對兒厮打／爬／方纔／務要／歎了數口氣／限差／簌簌的響／撒／寒粟子比餛［飩出］兒大小／待再／提爐／笑吟吟地／不保／爭些兒／可惜錯過／猥獀／道是去了／這兒晚／兩扇朱紅槅子／門上使着肱膊／大鎖鎖着交叉／胡說／火工道人／黑洞洞／火把點着／鋤頭／鐵［金秋］／鑿着／可方丈圍／喇喇／一聲響／一箇萬丈滲淺／滚将起來／掀塌了半箇殿角／目睜／口呆**

『水滸誌語録』：**一條桿棒等身齊打四百座軍州都姓趙／端只是／一連／雪片也似／羅天大醮／怎生／恁地／降降地燒着御香／約莫／看看腳酸腿軟／尚兀自／何曾／撲地／托地／捉對兒厮打／方纔／務要／歎了數口氣／限差／簌簌地響／寒粟子比餛［飩出］兒大小／待再／笑吟吟地／不保／爭些兒／提爐／可惜錯過／猥獀／道是去了／這兒晚兩扇朱紅槅子／門上使着肱膊／大鎖鎖着交叉／胡說／火工道人／黑洞洞／火把點着／鋤頭／鐵［金秋］鑿着／可方丈圍／刮刺刺一聲響／一箇萬丈滲淺／滚將起來／掀塌了半箇殿角／目睜口呆**

王望如評本『水滸伝』第一回

『水滸文解』：**掣閒／三瓦兩舍／那里肯信／胡說／喝采／淨手／如何敢小覷我**

／那里／首告／不覺錯過了宿頭／前不巴村後不巴店／消折了本錢／那箇頂着房屋走哩／休這般說／這箇不妨／多〃攪擾甚是不當／張我庄内做甚麼／莫不是來相脚頭／敢是欺負我沒錢／好大膽直來太歲頭上動土／那匹戰馬撥風也似去了／一趕都走了／猜疑捉摸不定／只除恁地／直恁義氣／自古道大蟲不喫伏肉／酒至數杯少添春色／望着那綠茸〃莎草地上撲地倒了／眉頭一縱計上心來／飛也似取路歸來／路上恐有些失支脱節不是耍處

『水滸傳語録諺解』：俅／跽／浮浪破落戸／踢／相撲／頑耍／胡亂／掣閒／掣／了／生鐵／三瓦兩舍／賭坊的閒漢／干隔澇／漢子／過活／老實的人／撇不過／面皮／思量出一箇路數／一套／遭際／淨手／不落手／一手做的／一併／便見／包袱／懷中揣／着／院公／沒多時／腰繫文武雙穗縧／把繡袍前襟拽扎起揣在縧兒邊／嵌／金線／發跡／鴛鴦拐／踢／東人／堂侯官／叉手／一回耍／何傷／三回五次／定要／解膝／喝采／本事／身分／門子／孤欲索此人／伏侍／樞密院／胡說／搪／塞／推病／連累／使花棒／理會／將息不起／首告／看那厮待走那里去／遮莫去那里陪箇小心／一週遭／方便／敢未打火／無故相擾／脱膊着刺着一身青龍／破綻／笑話／我不信倒不如你／恁地時／不當忖時／風車兒似轉／不合／心中難捨／打煞／又沒老小／探頭探腦在那里張望／莫不是來相脚頭／你往嘗／那討來賣／不可去撩撥他／端的了得／錦襖／［月答］膊／趕人不要趕上／休得要逞精神／欺欺揪住了［月答］膊／大蟲不喫伏肉／不當穩便／踉踉蹌蹌一步一攔／合當／他道我來相脚頭躧／盤／住擺得似麻林一般

『水滸誌語録』：浮浪破落戸／相撲／頑耍／胡亂／掣閒／掣了生鉄／三瓦兩舍／賭坊的閒漢／干隔澇漢子／過活／老實的人／撇不過／面皮／量出一箇路數／一套／淨手／不落手／一手做的／一併／便見／包袱／懷中揣着／院公／沒多時／腰繫文武雙穗縧／把繡袍前襟拽扎起揣在縧兒邊／嵌金線／發跡／鴛鴦拐踢／東人／堂侯官／叉手／做一回耍／何傷／三回五次／定要／解膝／喝采／本事／身分／門子／孤欲索此人／伏侍／樞密院／胡說／推病／搪塞／連累／使花棒／理會／將息不起／看那厮待走那裡去／首告／理會／遮莫去那裡陪箇小心／一週遭／方便／煖帽／敢未打火／無故相擾／脱膊着刺着一身青龍／破綻／笑話／我不信倒不如你／任地時／不當時／風車兒似轉／不合／心中難捨／打煞／又沒老少／探頭探腦在那里張望／莫不是來相脚頭／你往嘗／那討來賣／不可去撩撥他／端的了得［月答］膊／衲襖／趕人不要趕上／休得要逞精神／欺欺揪住了［月答］包／大虫不喫伏肉／不當穩便／踉踉蹌蹌一步一攔／合當／他道我來相脚頭躧盤／住擺得似麻林一般

楔子から抜き出された語句は『水滸文解』が13個、『水滸傳語録諺解』が53個、『水滸誌語録』が44個で、三書すべてに収録されている語句は 5 個。第一回の語句は『水滸文解』が39個、『水滸傳語録諺解』が91個、『水滸誌語録』が87個で、三書すべてに収録されている語句は 6 個である。

いっぽう、『水滸傳語録諺解』と『水滸誌語録』の収録語句を見比べると、大半が共通していることに気づく。他の『水滸伝』語録解とも比較しないと確かなことはいえないが、少なくとも『水滸傳語録諺解』と『水滸誌語録』は、直接的にか間接的にか、一方が他方を参照したことと考えられる。そして『水滸文解』がこの二書を参照した可能性は低いと考えられ、『水滸文解』は『水滸伝』語録解とは別系統の書であるといえる。

また、『水滸文解』に収録された語句はフレーズが多いが、『水滸傳語録諺解』『水滸誌語録』は語彙レベルのものが多い印象である。3. 3の例 3 で述べたとおり、『水滸文解』には「『水滸傳』読解のための語彙集」としての要素もあるが、主眼はやはり「撮其文法之可供當世者，寫景之形容逼真者」であり、『水滸傳』愛読者の守愚子が、『水滸傳』の文章の魅力を他の人々と共有したいという目的で、『水滸文解』を編纂したといえよう。

むすび

『水滸傳』は朝鮮伝来当初から、その題材や内容について批判されながらも、愛読者を増やし続けた。愛読者の一人許筠は、『水滸傳』の内容に惹かれ、『洪吉童伝』を著して、朝鮮半島では知らない人のいないヒーロー洪吉童を生み出した。もう一人の愛読者守愚子は、『水滸傳』の文章に魅かれ、その魅力を他者と共有すべく、『水滸文解』を著した。残念ながら守愚子の正体はわからず、『水滸文解』も日本の古書店が入手しなければ、存在を知られることもないまま、佚書となったかもしれない。今後、『水滸文解』について『水滸伝』語録解などとの詳細な比較検討を行えば、『水滸文解』の性格がさらに明らかになるだろう。

1　**兪春東**（유춘동）氏によれば、現存する『水滸傳』の語録解は27種である。**兪氏**『조선시대 수호전의 수용 연구』118～119ページを参照。

2　75巻の内訳は以下の通り。巻一から巻四に金聖嘆の「**序一**」「**序二**」「**序三**」「**宋史綱**」「**宋史目**」「**讀第五才子書法**」「**貫華堂古本自序**」、巻五に「**楔子**」が収録され、巻六以降に第一回以降が収められている。

3　**兪氏前掲書**、第 3 章 1 「『수호전』의 관련 기록」を参照。

4　**兪氏前掲書**、第3章1「『수호전』의 관련 기록」を参照。

5　**兪氏**は、現存する語録解の大部分は、『**水滸傳**』70回本の読解のために編纂されたとする。

6　『**論語**』「**子張**」に「**孟氏使陽膚為士師，問於曾子。曾子曰：「上失其道，民散久矣。如得其情，則哀矜而勿喜。**」とある。

7　「**紫陽**」は朱子学の祖、**朱熹**の別号。「**紫陽書**」で**朱熹**の書、あるいは朱子学を指すと考えた。

8　金聖嘆を指す。

9　『**資治通鑑**』巻七、始皇帝二十五年の項に「**臣光曰：燕丹不勝一朝之忿以犯虎狼之秦，輕慮淺謀，挑怨速禍，使召公之廟不祀忽諸，罪孰大焉！而論者或謂之賢，豈不過哉。**」とある。

10　『**詩経**』大序の「**詩者，志之所之也，在心為志，發言為詩，情動於中，而形於言，言之不足，故嗟歎之，嗟歎之不足，故永歌之，永歌之不足，不知手之舞之、足之蹈之也。**」に由来する。

11　「**無礙**」の誤か。訳文は「**無礙**」として訳出した。

12　第一巻から第四巻まで「段」、第五巻以降は「条」となっている。

13　貫華堂本（『古本小説集成』所収）および王望如評本（東京大学東洋文化研究所所蔵、「東洋文化研究所所蔵古籍善本全文影像資料庫」http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/index.htmlで閲覧）を利用した。

14　『水滸文解』には「王望如評總論」「序一」「序二」「序三」「宋史綱」「宋史目」「讀第五才子書法」「貫華堂古本自序」からの語句は収録されていないが、このことは仮想19巻本にこれらの項目が含まれていなかったことを意味しない。

15　70回本の十二葉裏六行から十三葉表一行は「**洪太尉倒在樹根底下，唬的三十六個牙齒捉對兒廝打〔奇句〕那心頭一似十五個吊桶，七上八落的響〔奇句〕渾身卻如中風麻木〔奇句〕兩腿一似鬥敗公雞〔奇句〇四句，一句一様，皆奇絶之文〕**」（〔　〕内は金評）と、連続する四句を「奇句」と評し、第四句の評で「**四句，一句一様，皆奇絶之文**」と四句まとめての評を付している。

16　漢語「**結果**」は命を奪う意だが、**諺**解に見える「결과ᄒᆞ다（結果ᄒᆞ다）」は、確認した範囲では、命を奪う意で使われた例はないようである。ただ『水滸文解』三葉裏十行「**不知結果了多少好漢**」の語釋①に「**結果言殺之**」とあり、著者守愚子は漢語「**結果**」の意味を理解していたと思われる。

17　『西遊記語録』『西廂記語録』との合綴本である。

18　外題は『滸廂遊語錄』であり、『西廂記語録解』『西遊記語錄解』『吏讀』との合綴本である。
19　『水滸志』とあるが、内容は『水滸志語録』である。
20　『水滸伝語録諺解』冒頭に「王望如評總論」から抜き出した語句を収録していることから判断した。

【参考文献】

유춘동『조선시대 수호전의 수용 연구』（보고사, 2014)
鄧雷編著『水滸傳版本知見錄』（鳳凰出版社、2017）
竹越孝「『語録解』と『水滸伝』」（『アジア遊学』131「『水滸伝』の衝撃」73～79ページ、勉誠出版、2010）
〃　「日本現存の小説語録解について」（『譯學과譯學書』第 2 号 5 ～27ページ、2012）
氏岡真士「七十回本《水滸》的 “原刻本” 和 “坊本”」（『信州大学人文科学論集』第 3 号（通巻50号）135～152ページ、2016）
鄭沃根「《水滸傳》在古代朝鮮的傳播和影響」（韓國中國文化學會『中國學論叢』第六輯95～117ページ、1997）

本稿は2022年 9 月 2 、 3 日に開催された國際譯學書學會 第13回 國際學術會議で発表した「『水滸文解』紹介－「文解」とはなにか」を一部改稿したものである。

An introduction to *Suhojeon eorog munbeob eonhae* - a literary work written by an admirer of the book in the Choseon period

Hiroyuki TAMURA

『水滸傳語錄文法諺解』소개 - 조선시대 『水滸傳』 애독자의 저작

명 (明) 나라에 성립된 장회소설 『수호전 (水滸傳)』은 중국뿐만 아니라 조선에서도 인기가 많았다. 또한 역관의 교과서로도 사용되었으며 『수호전』 속의 백화 어휘를 모아 해석한 「어록해 (語錄解)」가 다수 만들어졌다. 본고에서 다룬 『수호전어록문법언해 (水滸傳語錄文法諺解)』도 『수호전』의 「어록해」의 일종으로 보였으나 서문이 있다는 점, 저자명(號로 생각됨)이 적혀 있는 점 등 『어록해』에는 없는 특징을 지니고 있다. 또한 현존하는 『수호전』 간본은 貫華堂本(75권), 王望如評本(20권), 勾曲外史序本(75권)의 세 계통이 있으나 『수호전어록문법언해』가 대상으로 한 것은 목록이나 수록어휘 등으로 미루어 볼 때 19권본이라는 지금까지 알려지지 않은 판본일 가능성이 밝혀졌다. 본고에서는 이 수수께끼가 많은 『수호전어록문법언해』에 대해 소개한다.